

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会

編集人 同窓会会報編集委員会

印刷 常陽新聞新社



土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠 馬 作曲

- 一、沃野一望數百里 関八州の重鎮として
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水
- 二、春の弥生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて 湖心に澄むや月の影
- 三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の氣を享けて 我に至誠の精神あり
東国男兒の血を享けて 我に武勇の氣魄あり
- 四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男兒 亀城一千の健男兒

目次

12面	11面	10面	9面	8面	7面	6面	5面	4面	3面	2面						
平成23年度決算報告等	進路状況報告	職員室だより 部活動報告	定時制職員室より	母校だより	支部会・同期会だより	日本館の保存と改修	卒業生レポート⑰	恩師を訪ねて	卒業15周年記念同窓会	卒業25周年記念同窓会	卒業40周年記念同窓会	卒業50周年記念同窓会	卒業60周年記念同窓会	卒業24年度総会報告	学校長あいさつ	会長あいさつ

同窓会会長あいさつ

幡谷浩史 (高4卒)



会員皆様のご協力により、お陰様で5年振りの名簿発行の運びとなり同慶のいたりであります。しかし、先輩諸兄弟の空白欄が多数目立ち時世を感じさせられます。

昨今、若年者は自由競争の名の下、弱肉強食の色濃い時代の中で、大海原へ海図なしに航海を強いられている様に見えます。幼少時から勉強に励み目標校へ進学、大学へそして心弾ませ専門分野を専攻し、いざ卒業となると就職難。目標とは程遠い職種への就職、又は学年留年か就職浪人かを選ぶ。要因は色々考えられますが、少子高齢時代の到来と相まって、高齢者対策の優先で定年延長(政令化)も決まり、若人達の働く場所がますます狭き門となってしまう。更に追い打ちをかけて様な長期デフレ、失われた20年とも揶揄される経済状況の中で企業は生き残りを賭けて海外へ移転して行き、ますます就職出来ない環境となつてしまいました。戦後、復興を合言葉に先人先達

はそれこそ死にもぐるいでより良き生活を求め、追いつけ追い越せと一生懸命に働き続けました。その最中に政策設定した、年金、健康保険を含めた医療、退職金(中退共)等々の制度は現代にそぐわないものになりました。国力に見合わない社会保障制度を続ける事は出来ません。なおさら社会保障制度の充実など容易ではありません。既得権益を手放そうとしないのは官僚だけではない事を、国民一人ひとりが認識すべきです。霞が関官僚組織も硬直化、文部科学省然り、学校教育方針等を見ても活気ある組織とは云えず、気づけば子供達のいじめ問題が全国的に発覚し、教育界は警察行政にも支援を受けやつと正面から自殺防止、いじめ問題等、真摯に受けとめる体制づくりの最中とみえます。震災復興予算に群がる白蟻の様に、各省庁は予算分捕り合戦を展開中です。これらの財源は、これから25年納税を続けながら消費税アップとダブル納税で賄うこととなります。ご承知を!

おわりに、同窓会報には不適切な挨拶になると思いますが、少子高齢社会を突き進むこの時代、本気で世の中を改革していかないと日本全体が爆沈するのではないかと心配しています。同窓会員の減少を避けるために、お近くの友人知人の情報も宜しくお願いいたします。

学校長あいさつ

学校長



進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。また、生徒会や部活動への毎年多額のご援助、生徒の海外研修へのご支援、そして生徒の安全を確保する観点から急遽お願いした防犯カメラ装置の設置など、母校の様々な教育活動に多大なご支援をいただいておりますことに、学校を代表いたしまして、心からお礼を申し上げます。本当に有り難うございます。

さて、本校では現在、83名の教職員のもと、全日制課程の普通科24学級965名(男子593名、女子372名)、定時制課程の普通科4学級96名(男子55名、女子41名)が学んでおります。生徒諸君は「頭鍛え、体鍛え、心鍛え」の標語のもと、質の高い授業への

武井秀一

取組み、自主的活動(部活動や生徒会・委員会活動)と家庭学習の両立を目指して、元気に学校生活(二高スタイル)を送っております。

今年も、生徒の自主的な企画運営による三大行事の一つである6月の「第65回一高祭」には、2日間で6370名の来校者があるなど、大変盛り上がりました。また、9月の「第35回一高オリンピック」、そして10月の「第44回歩学会」も先輩諸兄が築いてこられた伝統は、本校独自の学校文化として連綿と後輩諸君に受け継がれております。

部活動の加入率も8割を超え、全日制ではインターハイ等の全国大会に陸上競技部、将棋部などが、定時制では全国定通大会にバドミントン部、陸上競技部などが、個人種目ではあるが出場を果たすなど、文武両道を追求した学校の教育活動を展開しています。

ところで、進修同窓会のご支援で実施しておりますSEG(once Explorers Group)も4年目を迎えます。大変好評です。3月後半に1、2年生約40名を米国

のMITやウッズホール海洋生物研究所などの最先端研究施設に派遣しているものですが、毎年かなりの応募があります。本校としても、教室だけでは学べない奥深い学習と、将来様々な分野でリーダーとして活躍できる優秀で骨太の人材の育成に努めている所です。

もちろん、本校の長き伝統であり、特色でもあります進学指導にも大変力を入れていきます。詳細は後述の平成24年度入試合格状況をご覧いただきたいと存じますが、東京大学はじめ難関大学、医学部医学科にも多数の生徒が合格をしております。

生徒諸君は、真鍋台の丘に建つ教室でグラウンドで、様々なことを大いに学び、励み、3年間で大きな成長を遂げ、そして卒業後の進路でも高い理想を追求し、自己実現を図っています。優秀で個性豊かな生徒諸君を預かる者として、創立115年の歴史の重みと、この3月で旧制中学校以来3万人を超えた卒業生を送り出した全国有数の伝統校として、土浦一高の更なる発展、深化を図るべく精一杯努めてまいり所存でございます。同窓会の皆様方には今後とも、一層のご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。挨拶といたします。

平成24年度

進修同窓会総会開かれる

去る4月8日(日)、本年度進修同窓会定期総会が、母校体育館に於いて、祝賀周年卒業者等の参加者が年々増え、540名も出席され、盛大に開催されました。

総会は、恒例となった応援指導部のリードと吹奏楽部の演奏による、校歌、応援歌、一高讃歌の斉唱で開会し、物故会員への黙祷の後、幡谷同窓会会長・武井学校長の挨拶があり、23年度事業報告及び決算報告、24年度事業計画及び予算、規約改正、役員改選等が審議・可決承認され、同窓会会員名簿(平成24年版)発行の準備状況と日本館校舎改修促進の現況報告がありました。引き続き、役員の退任者2名に感謝状を贈呈、その後同窓会からの助成により実施された第3回生徒海外研修(Science



応援指導部のリードで開会

Explorers Group)の代表生徒が研修成果を報告(詳細は土浦一高HP)。総会を終了しました。

続いて、以下の学年の卒業周年祝賀式が行われました。

卒業60周年(併中2回・高4回・定2回)、卒業50周年(高14回・定12回)、卒業40周年(高24回・理数1回・定22回)、卒業25周年(高39回・理数16回、定37回)、卒業15周年(高49回・理数26回・定47回)。祝賀式は、高15回の山田隆士氏より祝辞、会長から周年記念招待者へ記念品贈呈、高14回の足立寛作氏が、周年招待者を代表して謝辞を述べ、終了後、会場を移動して懇親祝賀会が、前年中止となった関係なのか、今年は、例年になく490名という多くの参加者で盛り上がりました。



総会の会場風景

併設中二回・高校四回

卒業六十周年記念祝賀同窓会

私たちの学年は戦後の昭和21年、旧県立土浦中学校最後の入学で、昭和23年の学制改革により現校名に改まった。その間、東京など都市部からの被災疎開者や国外からの引き揚げ者等の編入があり、学制改革による新制中卒の一年級も加わった。生徒の多くが中・高併せて六年間も共にした生活が級友関係を密にしたのか、教年前まで、春には土浦、秋には東京と年一回の同窓会が開催されていたが、さすがに近年は春の土浦のみに限られるようになり、昨年はそれも大震災の影響で取りやめとなった。

そういうわけで、同窓会は二年ぶりに加え、進修同窓会より「卒業六十周年記念祝賀」としてお招きいただいたおかげで、母校同窓会総会における「卒業六十周年記念祝賀式」、続くホテルマロウド筑波での「卒業六十周年記念祝賀会」共に七十名を超える出席者を数え、十年前の筑波山江戸屋での「卒業五十周年記念祝賀同窓会」以来の盛況となった。



祝賀会はいつも通りの古渡幹事の司会で進められ、飯田幹事の開会に先立ち同窓物故者に黙祷を捧げましょう。お声かけで、今やその数も少なくない同窓の御霊に敬虔な黙祷を捧げた。そして岩瀬幹事の開会のことにより開会。冒頭まず同窓会長本橋道明君から、毎春恒例の観桜同窓会が、昨年ばかりは大震災の影響でやむなく中止となったが、本日も大勢のご出席を得て、卒業六十周年記念の祝賀を迎えることができたのは、各幹事はじめ同窓各位のご協力の賜物であり、厚く御礼申し上げる旨のご挨拶があり、次いで、現在進修同窓会会長の重責を担う幡谷浩史君より、母校同窓会活動に鋭意取り組むべく力強い決意のほどが披露され、幡谷会長と二人三脚で進修同窓会副会長を務める元母校校長大曾根宏亮君からは、NHK連続TV小説「おひさま」で全国的に知名度を高めた国指定重文日本館の大震災による影響や、日本館保存に向けての今後の道筋等についてご説明いただいた。

続いての祝宴は、土肥幹事の気合満点の乾杯の音頭で明るく開会。めいめい旧友の席を巡ったりまた巡られたり時間を忘れての歓談のうちいつしか終宴が近づき、元音楽科教師中島幹事の揮うタクトのもと校歌斉唱へ。自稱お祭り男の福田幹事も、ふだんは折り目正しい紳士の岡部幹事も、幹事ら同士が肩を組み身を揺らせて歌うその熱気に引き込まれるように全員が起立して校歌を熱唱。振り返れば、思い出せない真鍋台での日々、よみがえる記憶の背景には、校門(旧正門)からの緩いスロープを進むと、左手に姿を見せる日本館の端正なたたずまいがいつも浮かんでくる。

来春もまた旧本館前庭の桜の樹下での再会を約する近藤幹事の閉会のことばで、長くもあり、短くも感じた一日が閉じた。(高四回 上木幹夫)

卒業五十周年記念同窓会

高校卒業五十年目の春を迎え、四月八日は式典日和となった。遠方から懐かしい面々百二十余名が集まり、旧交を温め合った。

総会終了後の祝賀式では、お祝いの言葉、記念品を頂戴し、謝辞は、足立寛作実行委員長が務めた。一高の思い出、本校卒業の誇りと愛着、社会の情勢と将来像、更に記念誌

新任職員紹介

定時制教頭 石井 孝



今年度四月に赴任致しました石井でございます。進修同窓会会員皆様の本校に対する多大なるご支援、心から感謝申し上げます。

伝統ある土浦一高のさらなる発展のために、微力ながら全力で取り組んでゆく所存でございます。よろしくお願いいたします。

「縁を絆」の思いなど、感謝の気持ちを込めて流暢に述べた。

式の後、日本館を背景に記念撮影をした。晴れやかな表情は、母校を訪れての懐古や安堵ではなかったらうか。

同窓会は、マロウド筑波に会場を移し、恩師大竹勉・川村安宏両先生にご出席頂いて開催した。飯田・岡田両君の司会で進められた。物故者への黙祷、足立代表の挨拶、両恩師の祝辞、そして、仙台在住の滝川君による乾杯で祝宴が始まった。友は思い思いに、五十年振りの再会に握手を交し、若き日の記憶を蘇らせ、当時の思いを確かめ合おうとして、余年が無い様子であった。各組代表の語りや野球部・ヨット部など活動の秘話は、まさに高校時代へのタイムスリップとなり、弥が上にも盛り上がりを見せた。

長時間の宴も、後輩の音頭による懐かしの校歌と力強いエルで若き日への郷愁を更に強めることになった。余韻に浸りながら十年後の再会を誓い散会した。

当日の読売新聞に「絆」についての記事があった。それは、大地震後に避難されている方が、「絆」って言葉をよく聞くけど何か違うよ。俺らは今も孫や友達とバラバラのままなんだから」と叫びたとあった。「絆」は大地震の後様々な場面で頻繁に使われた。今回の記念誌は「高校卒業五十周年」という縁に感謝

3面からの続き

して絆へと育み、互いに豊かな熟年生活を送ろう」との思いから作成された。被災された方々と思いは異なるかも知れないが、帰るところは同じだと思う。被災地の復興が一日も早く訪れることを祈りながら、記念誌のテーマ「縁を絆に」を改めて考えた。

五十周年記念事業は、テーマの発案者、故説田太郎君の思いを受けて着実に歩み始め

祝賀して下さった進修同窓会、母校、恩師、協力してくれた同窓生に感謝申し上げます。(高十四回卒 杉山久三郎)



卒業40周年記念同窓会開催

高校を卒業して40年、まったく光陰矢のごとしであり、この度、卒業40周年記念同窓会及び第8回同窓会を4月7日にオーケラフロンティアホテルつくばで開催しました。

私達の同窓会は、毎回、高校卒業以来の土浦市内に居住している者が中心となり、開催しています。今回は、63名(恩師4名、同窓生59名)が参加して、記念すべき同窓会を盛大に挙行了、翌日の記念式典には、代表15名が参加しました。

回数を重ねる度に、年相応となり風貌は変化しますが、皆高校当時の面影があり、人達いすることは無いようでした。予定の2時間は瞬く間に過ぎましたが、楽しく懐かしい一時を過ごすことができました。卒業40年を経過し、歩んだ道もそれぞれ異なっていますが、皆納得できる人生を過ごして来たと思います。

同窓会は、不肖私の司会で進行し、藤澤一志君の開会の言葉、飯田修三君の物故者(恩師3名、同窓生16名)への黙祷、海老原一郎君の代表挨拶、恩師の挨拶、記念品贈呈、ク



卒業40周年記念 土浦第一高等学校第24回卒同窓会

ラス・全員での記念撮影の後、堀秀光君の乾杯の音頭で開宴となりました。数年ぶりに再会する同窓生もいることから、近況確認などで話が弾んでいました。

楽しい時は、瞬く間に過ぎ去り、応援団部OBの高柳明己君の音頭で高らかに校歌を斉唱し、その後全員で恩師へエールを送り、恩師の益々のご健勝とご活躍を祈念し、名残惜しいことですが、またの再会を楽しみに、山本雅生君の開会の言葉で、お開きとなりました。

その後は、気のあつた同窓生同士で、2次会、3次会と旧交を深めた様でした。

高24回の同窓生は、378名ですが、卒業後の転居などで、残念ながら所在が不明で同窓会の通知が送れないことから、毎回の参加者が70名程度になってしまっているのが、残念です。なお、主催者側としては、同窓会の開催通知が届いている場合には、出欠は別として近況報告も兼ねて、返事をもらえれば幸いです。

卒業25周年記念同窓会

学校の秋入学が取りざたされる昨今ですが、1年の起点はやはり春だと感じます。若々しい春と活動的な夏を越えて、卒業25周年を迎えた我々は人生の実りの秋を迎えようとしています。こんな季節を迎えた本年の4月8日(日)に、進修同窓会主催による卒業25周年祝賀式典と祝賀会が開催されること共に、同日夜に学年幹事主催の同窓会(二次会)を行いました。まずは昨年11月以降、今回の会合のために同級生への連絡先の掘り起しと連絡や会の企画に尽力頂いた学年幹事の皆様と貴重なアドバイス下さった学年主任の恩師植木元生先生、ご臨席下さった恩師の先生方に感謝致します。

そして、この再会の機会を与えて下さった進修同窓会と、お手伝い下さった進修同窓会事務局の皆様にお礼を申し上げたいと思います。

卒業15周年記念同窓会

特に幹事として嬉しかったことは、これらの輪の中で各クラスのクラス会が既にいくつも提案されたことでした。そう、今回の同窓会はひとつのきっかけです。「25周年にどうか集まる」という進修同窓会の企画は、準備はそれなりに大変ですが、沢山の笑顔を同窓生にもたらすものと思います。今回の沢山の再会が、参加された方々のそれぞれの人生の秋に、新たな彩りを与えてくれることを期待して、また晩秋を迎えた次の40周年同窓会での再会を祈念して、筆をおきたいと思えます。(高39回卒 高橋嘉夫)

私達、高49回・高理26回卒生は4月7日(土)に学年同窓会を行い、8日(日)に同窓会総会、祝賀式、祝賀会に参加しました。

私達はこの15周年記念同窓会まで学年での同窓会を行っていませんでした。そのため、連絡先不明の者も多く、初めての同窓会にどれだけの人数が集まるのか全く分からない状況からのスタートでした。

昨年11月の卒業周年祝賀会の説明会で青山君、石崎君と再会し、1月にクラス幹事11名で打ち合わせを行いました。話し合いの中で、遠方から来る者が多いため7日にも学年同窓会を行うこと、出欠の確認は往復はがきその他にメールやFacebookも使うこと、また遊佐君の提案から各クラス幹事が共通して出欠を打ち込むリストを作成することなどが決まり、その後の連絡にFacebookを活用することが決まりました。また7日の会場については五十嵐君がその場で土浦・つくば周辺の会場に連絡をしてくれ、ラ・フォルスタ・ディ・マニフィカに決めました。話し合いはスムーズに進み、改めて一高のメンバーの連携の良さを感じました。

7日の学年同窓会は石嶋さんの司会のもとに進み、懐かしい友人や恩師との会話が弾みました。学年主任の浅野先生を始め、担任の先生方から「30代をどう生きるか」など温かい励ましの言葉をいただきました。



(松井泰道)

恩師を訪ねて

社会科 大塚 栄先生

在職

昭和三十八年(五十三年(教諭))
昭和六十一年(平成元年(教頭))



はじめに

今回の恩師は、社会科の大塚栄先生を訪ね、先生の生徒・教諭・教頭時代と三度にわたる一高での生活ぶりについてお話を伺いました。

八月にあらかじめ取材についてのご協力をいただくことと、少し涼しくなる九月に再度お邪魔をしてお話を伺うことをお願いしました。その際、先生は、「俺、呆けてきたからあまり憶えていないぞー」とおっしゃっていました。が、実際お話を伺うと、何の何の、そのお話しは、四十年前の先生の講義の時と全くお変わりのない様子でした。

激動の生徒時代

先生が、土浦中学校に四十八回生として入学されたのは、昭和十八年、まさに太平洋戦争末期の大変な時代でした。入学しても本来の勉学よりは、ペンを銃に持ち替えての軍事教練や学徒動員として

海軍工廠にて兵器生産の一翼を担うような状況でした。

従って、終戦後、一高での生活が復活すると、とにかく学校生活が新鮮で、しかも優秀で学問的に深く人間的に温かみのある先生方の薫陶を受けることができ、そうした先生方に刺激され、感化されて勉学に勤しんだことが懐かしく思い出されるのでした。

卒業後は、戦後の混乱期ということもあり、二年ほど実家で農業をしていたのですが、学問への探求心は衰えることなく、新制高校三年生(一年間編入し、受験に備えることになりました)の甲斐あって、見事東北大学への入学を果たし、西洋史を専攻され、やがてかつての恩師の先生方に憧れ、教員としての道へと進まれることになったそうです。

あこがれの母校赴任そして担任

大学卒業と同時に、教職の道に入った先生は、石岡二高・日立工高を経て、昭和三十八年母校へ赴任することになりました。赴任当初は、地理を担当し、戸惑いもあり、夢中で勉強し授業に臨んだもののだが、生徒の理解の早さに助けられたという事です。二年目には矢口四郎学年主任の下、十九回生の担任をなされ、続いて同学年主任と共に二十二回生の担任をなさいました。

この間、生徒を思い、生徒の自

主性を重視する先生の真骨頂が発揮されたのは、世界史の授業と担任としての学級経営でしょう。

世界史の授業にあつては、手間暇を惜しまない先生の労作、学習ノートの作成です。生徒の学習効果と授業進度を考慮し、ガリ印刷り印刷で作成し、原価で頒布したそうです。二十年くらい後の時期になれば市販の学習ノートや参考書は豊富になりますが、大変詳しい内容のノートで、当時としては生徒にとつても、学習内容を着実に身につけることができ、学習効果も大きな参考書であったわけですね。

また、先生二度目の担任時代(二十二回生二年生時)のエピソードで、クラスで休み時間等にトランプ遊びが流行ったことがあったそうです。先生ご自身は叱りつけてもやめさせたいと思いつつ、生徒の自主性を重んじ生徒の生き方を尊重する先生のお考えから、表面的には笑顔をもって、ホームルームの時間に話し合いを持ったそうです。しかし、生徒たちは「ストレス解消のため」などと言って、わざと担任を困らせようとする様子を見せていたのですが、ある女子生徒の「昼休みなど、予習をしている際に、周囲で遊んでいられるのは本当は迷惑」との一言で、あれほど流行った遊びも沙汰止みになったとのことです。

このことについても先生は「この生徒たちはすばらしいし、感心するばかりだった。話をしていると自然に通じ合える。教師として幸せであったし、楽しかった。」としみじみ話されていたのが大変印象的でした。

学年副主任(二十五回)・主任(二十八回)

昭和四十年代半ば、日本中に学園紛争の嵐が吹きまわっていた時代、高校生の中にもその影響があり、一高の生徒の中にも元気のよい生徒があり、随分と相談にも乗ったそうです。しかし先生は「そんなことはやめろ！」と言いつつ、頭ごなしに叱りつけたり押さえるのではなく、生徒たちの純粋な考え方には共感できるものもあったとして、夜中になるまで話し合いをするにしようとしたことについても先生は、「人としての生き方などについて話しても、それについてくることのできる生徒だった。価値観を同じくすることができ、むしろ楽しかった。」と、また、「一高祭でもそのほかでも、生徒たちは次々と新しいアイデアを出してくる。本当に生徒たちとの生活は楽しかった」とも当時を懐かしそうに思い出されていきました。

また、先生の学年主任の時代の大きな出来事としては、昭和四十九年の茨城国体への参加でした。学年の生徒が全員マスマスゲームに参加するという事で、練習のために笠松運動公園へしばしば動員されたことでした。生徒たちは小旅行気分になり、学習時間が減り、進学のためには問題有りとして強い反対の気持ちを持ちつつ、各方面とも折衝を繰り返して、各方面と折衝を繰り返して、一高生は半数ずつ練習に参加するということを取り付け、渋々ながらも国体に協力したそうです。

「実際、この学年は、進学率が低くなり、それだけが心残りであった」と、苦々しげに話されたのも印象的でした。つねに生徒を

思い、生徒中心に考える先生ならはと、納得するばかりでした。

進路指導主事

学年主任を終えた先生は、進路指導主事として、学校全体の進学を考える立場におおきになりました。が、前指導主事の宮崎先生が導入した偏差値をもとにした進路指導を展開することにしたそうです。情報処理業者と提携して、データ処理をする場合、経費の件も含め問題山積の中で、当時の遠藤校長の鶴の一声で、本格的に始めたそうです。先生はしきりに、「遠藤校長の先見の明に感心するばかりだ！」と、話されていました。

教頭として再び母校へ

昭和六十一年、先生は、九年ぶりに、教頭として母校に戻られました。生徒時代はもちろん教諭時代からも時が経ち、多少の戸惑いもあったのではないかと想像したのですが、先生は、「二高に戻って強く感じたのは、先生方のみこみが早く、ホッとした！赴任時の挨拶で『私は、先生方が、言いたいのをお手伝いするために来ました』と、言ったが、いつも先生方を信頼し、小言を言うこともなかった」と、また、「生徒の頃も、教諭時代も教頭としても、楽しい思い出ばかりで、言うことをすぐに吸収してくれる人たちとの生活は、楽しい思い出ばかりです。」と、最後にお話しくださいました。

おわりに

八十を過ぎて尚、正義感あふれる、多少気短な先生のお姿に接し、常に生徒を思い、生徒の自主的な生き方を支援してきた先生の真骨頂を垣間見たような気がする訪問でした。

卒業生レポート

17

緩和医療の現場から

筑波メディカルセンター病院 緩和医療科 医師

木村 洋輔



○家庭医療、緩和医療とは

私は総合診療医として家庭医療を学び、現在は緩和ケアの現場で働いている...

○家庭医療、緩和医療とは

「家庭の医学とは違うの？」という声があがりそうですね。家庭医療とは地域に根差した、まちのお医者さん...

「家庭医療、緩和医療とは」という声があがりそうですね。家庭医療とは地域に根差した、まちのお医者さん...

とがでたり、避けられない死や痛みをコントロールして平穏に最期を迎えることは、多くの人たちが望んでいることではないでしょうか...

○家庭医療や緩和医療を志したきっかけ

私の高校生活は、本当によい仲間恵まれた3年間でした。特に3年生の時には、同じテニス部で共に医師を目指す3人とクラスメイトになり、受験勉強に心が挫けそうなる時も二人の背中を追いかけ...

「家庭医療や緩和医療を志したきっかけ」という声があがりそうですね。家庭医療とは地域に根差した、まちのお医者さん...

研修の機会に恵まれ、地域で働くことの意味を学びました。

私が往診に向かった先の患者さんは、肺がん終末期の80代男性、Aさんでした。Aさんは喉から気管に穴を空けて息の通り道を確保すると、気管切開をしていました...

○緩和医療の現場から

その後は後期研修を修了し、現在は緩和医療をより深く学ぶために緩和病棟に勤務しています。そこは特別なことをする場所ではなく、患者さんが自分らしく生き切ることをサポートする場であり、なんでもない日常生活がとて愛おしく感じる場所でもあります。

○緩和医療の現場から

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

○緩和医療の現場から

Bさんは元気なころから「最期は穏やかに逝きたい。つらさを取って過ごしたい。」と息子さんや私たちと話し、息子さんも「できるだけ母の思いを尊重したい」と話していました。私たちは、症状を抑え彼女の体力を維持するために、負担の少ない検査や治療を行い、そして一月ほどして彼女は穏やかに亡くなりました。

○緩和医療の現場から

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

○緩和医療の現場から

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

○緩和医療の現場から

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

○緩和医療の現場から

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

○緩和医療の現場から

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

○緩和医療の現場から

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

○緩和医療の現場から

「今日はバレンタインですね。大切な息子さんにチョコレートプレゼントしてみようか？」という日があるの？知らなかったわ。でもやったことないから、どうしたらいいものかしらねー！

【経歴】平成11年 土浦第一高等学校卒業
平成11年 宮崎医科大学医学部入学
平成17年 宮崎医科大学医学部卒業
平成17年 筑波大学附属病院初期研修コース
平成19年 筑波大学附属病院総合診療科後期研修コース
平成23年 筑波メディカルセンター病院 緩和医療科
【資格】日本内科学会認定内科医、日本プライマリ・ケア連合学会認定 家庭医療専門医、日本在宅医学会認定 在宅医療専門医、日本医師会認定産業医
【分担執筆】備してはいけない外来患者 医学書院 2012年2月 「視力障害」「精神症状」臨床婦人科産科 66巻13号 (2012年12月号) 「これだけは知っておきたい婦人科がんの緩和ケア」 がん疼痛の治療と評価法

日本館の保存と改修

進修同窓会旧本館活用委員会

飯村弘

まえがき『アカンサス』の志

本委員会は、本校の長い歴史の中で語られてきた色々なエピソードを、情報紙『アカンサス』(毎月1回発行)を通じて生徒諸君に発信している。開校当時の本校の様子や運動会・遠足などの学校行事、校訓や校歌の制定の経緯等々、その内容は多岐にわたっている。当然ながら、国の重文であり、本校のシンボルでもある旧本館についても、しばしば取り上げてきた。特にこの文化財の保存に関するものは少なくない。

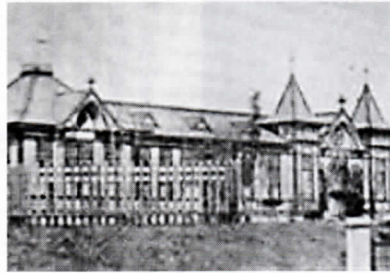
そこで進修同窓会が、「旧本館校舎改修促進委員会」を組織し、総力をあけて、この建物の全面的な改修をめざす動きを活発化させている。今、これらに関連する記事の一部を、これまでの『アカンサス』から抜粋し列挙してみたい。

『アカンサスの学舎』

旧本館には、数多くのしかも様々な装飾が施されています。その中でもこの建物のシンボリック的存在と言っても過言でない装飾があります。それが「アカンサス」という植物の花と葉をモチーフにしたデザインです。

右下の竣工間もない真鍋台新校舎の写真を見て下さい。正面玄関屋根及び左右両翼の切妻破風の頂点に十字架の様な飾りが見えますね。これこそ、かつて、四弁の花が雄大に咲き誇っている「アカンサス」そのものなのです。残念なこと、今は三つともありません。代わりに正面玄関上には貧弱な四角錐の飾りがあるだけで、左右の破風には面影すらありません。しかし、「アカンサス」が全く消えてしまったわけではありません。正面玄

関の三連アーチの柱頭部に「花」を、東



竣工当時の旧土浦中学校本館『進修』第6号(明治38年4月刊)より

西の通用口の軒の屋根には「葉」を象った装飾が現存しています。この「アカンサスの学舎」も、いずれ全面的な解体修復が避けられません。その時こそ見事な四弁の花を再び雄大に掲げたいものです。ここに私達活用委員会が「アカンサス」にこだわる理由があるので。

第4号(平成20年7月10日)

富山県立農学校の保存と活用

農学校旧本館は、縦長な上げ下げ窓や外壁の下見板張り、復元された正門の門柱など、わが旧土浦中学校本館に共通する部分が少ない。

平成9年、国から重要文化財に指定され、平成14年に保存修理工事が始まり、17年8月に完工し、正門も復元され、建築当時の姿を現した。移築後「島嶼記念室」ほか展示室などを設け、生徒の利用にも供していたが、現在では「富山県立美術館移動美術展」、「特別企画展」、「コンサート会場」など、外部に向けても多様

《宝の持ち腐れ》にしないために

全国には、文化財の指定こそ受けていないが、草創期の校舎を有する高校は数多くある。移築改装して記念館・資料館・現役教場として保存・活用している例が多い。

重文指定の校舎では、通年一般に公開されている前述の「巖浄園」や郡山市の郷土博物館として開館している安積高校旧本館は、既に大がかりな解体修復を済ませ、文化財としての在るべき姿を確立しているといえよう。本校旧本館は、限定的な公開に止まり、活用面でもまだまだの感があり、建物の保存・活用におお一層の創意工夫が必要である。

旧土浦中学校本館は、他の重文校舎と比べても決して見劣りするものではない。掛け値なしに第一級の文化財校舎である。しかし、専門家の調査で、眼に見えない建物内部にかなりの老朽化が確認されている。このままの状態が続けば近い将来、間違いない朽果ててしまう。何となく全面的な解体修復による保存こそ緊急の課題である。その実現には、同窓生、地域の人々や県や国の理解と支援が必要である。

に活用されている。その活用には「保存活用委員会」が当たっているが、地域は勿論レベルでの保存と活用がなされ、文化活動上、重要な拠点の役割を担うに至っている。

第9号(平成21年1月16日)

旧本館の被害は軽微か?

建てられてから108年になる本校旧本館も今回の未曾有の大震災に見舞われ、少なからず損傷を受けた。多くの卒業生などから、文化財である母校校舎を案ずる間い合わせが寄せられた。

地震直後、一見した限りでは、大した被害は無さそうに思えた。窓ガラスが数枚破損した程度で、建物自体、些かも傾くことなく堂々とした姿を維持していた。しかし、数日後、校舎内外を隈なく点

検することで、壁のひび割れや柱のズレ、土台部分の煉瓦の破損など、至る所に強烈な揺れによる傷痕が見い出された。特に、旧本館のシンボルともいえる正面玄関の三連アーチを構成する2本の柱のうち1本が台座上で数センチ横にズレて傾いていることや、今まで見られなかった箇所にも相当な雨漏れが生じており、屋根瓦の一部に破損が考えられるなど、建物そのものにかんがりのダメージが及んでいるように思われた。いずれにしても専門家による徹底した調査が急務である。

旧本館は百余年の風雪に耐えてきたが、床下や屋根裏など見えない部分にかなりの老朽化が進んでいることは、数年前の文化庁の調査でも明らかになっている。このことを受けて本校同窓会は旧本館改修促進委員会の組織を立ち上げ、総力をあけて県・国に文化財校舎修復を働きか



23年3月撮影
窓が破損した
脱落し破損した
脱(大震災直後の)

けようとしていた矢先、今回の東日本大震災である。明治の先人が魂をこめて創り出した旧本館は大正の関東大震災にもたえた。そしてこの度の未曾有の大震災にも何とか耐え抜いてくれた。しかし、その後も続く余震で揺れ、軋む音が校舎の押し殺した悲鳴にも聞こえて仕方がない。

一刻も速い対応が待たれるが、官民をあげて東北地方の地震・津波・原発事故の大災害を克服しなければならぬこの時期にあつては、残念ながら文化財校舎がこれ以上痛まぬよう只々祈り、見守ることしかできないのが現実である。

第34号(平成23年4月11日)



か柱
座の台
大震災により
はみでた
ら(平成23年8月撮影)

旧本館における喫緊の課題

聖堂等の建築を通して蓄積されてきた厳肅な空間と光量の最大限を追求したゴシック風建築。その技術の粋を尽くした旧本館。天を指す尖塔、多様なアカンサス意匠、手すきガラスの大窓、高い天井と高床の室内。どれもこれも目を見張る匠の技。築後108年を経た国重文であるとともに、同窓生にとっては青春の聖なる記念塔にもなっている。今秋にはここで結婚式を挙げる卒業生もいると聞く。

旧本館は、一部教室が部活動に活用されているが、30年以上にわたる通常授業には使用されていない。にもかかわらず、従前からの雨漏りなどに加え、先の大震災の影響(小紙34号で詳述)もあって、損傷は建物全体に拡がっている。今後は、解体修理を含め、保存の方法を真剣に検討することが喫緊の重要課題であるのは論を待たない。それは、単に貴重な文化財を保存する意味合いにとまらず、「大棟梁駒杵勤治」の志を後世に継承させていくことにも通ずる。これが今の私どもに課せられた使命ではないかと思う。

第38号(平成23年9月6日)

損傷が広がる本校旧本館

「モノにココロあり。先人のご苦労に対する感謝の念を持つ気構えがなくして、文化財を語るなれ」と、建築文化史家一色史彦氏(高11卒)は以前に話された。今回(訪れた旧富山県立農学校)の「巖浄園」では、「先覚者への感謝の念」が、その「名」の中に直接的表現で込められ

ているのに接し、一色先生の言葉が頭の隅をよぎっていった。また、先人の遺産たる文化財の保護・保存・維持が難しく叫ばれ出して久しいが、現実の場では「守っていかう」との気概と情熱にあふれた人々の必死の叫びと行動によって、それがこなされてきた経緯も把握できた。もし「守ろう」とする大きなうねりが起きなければ、文化的価値がどんなに高いにせよ、建造物は所詮消滅する運命にあるのかもしれない。そうした意味で、今回の視察は実に有意義であった。

それにしても、「教育の充実こそ、日本の将来を築く基礎づくり」という先哲の志が凝縮され、私たちに与っては「宝物」と言える本校旧本館。竣工して108年を経て、損傷拡大を懸念する声は次第に高まってきている。先の大震災による壁の剥落やひび割れは、至る箇所で見られる。過日も、玄関の柱が台座よりずれてしまったため、文化財専門家による修復工事がなされた。その折にも、単なる「ずれ」にとどまらず、長年の風雪による柱の中心部(芯柱)の腐食は甚だしい、との指摘を受けた。所轄官庁である国・県は、調査には足を運んでいたが、本格的補修については、今も口を濁すばかりだと聞く。今や「待ったなし」だと心得る者には、もどかしさが漂ってくる。

第39号(平成23年10月11日)

豊かな造形美をもつ旧本館

平成21・23年にかけては、NHK関係のロケだけでなく5件も続いた。ドラマスペシャルの「白洲次郎」、同じく「坂の上の雲」、「トライエイジ」三世代の挑戦の「金田一家の物語」、そして連続テレビ小説「おひさま」である。

いずれも旧本館の復元教室が主に利用された。この国重文校舎は、「白洲次郎」では旧制中学校に、「坂の上の雲」では海

軍兵学校に、「金田一家の物語」では帝国大学に、「おひさま」では高等女学校に、明治・大正・昭和の各時代の様々な学校に擬せられ、どれも見事な「絵」になっている。もちろん優れた映像制作技術によるものであろうが、この建物の計り知れない造形の豊かさが多様な要請にしっかりと応え得たものだと言えよう。

第43号(平成24年2月7日)

旧本館は本校だけでなく国の宝物

現在の本校教諭開隆一氏から賜った一文(要旨)を紹介したい。

「県東地区の学校で学び育った私は、旧本館の存在を知らなかった。2004年、会議で土浦一高を訪れた折に旧本館を偶然目にした。驚きと感動で、思わず息を呑んだ。その後、土浦一高に勤務することとなった。赴任が決まったとき、最初に思い出したのは旧本館の厳かな姿であった。伝統ある本校のシンボルとして、これからも旧本館は、確かな存在感を放ち続けるものと確信している」と、荘厳なる威容と尽きない魅力を綴っている。言うまでもなく、旧本館は本校だけのものではなく国の宝物。この保存と活用への責任の重さに、私どもは、今更ながらに、身が引き締まるのを覚えるのだ。

第45号(平成24年4月10日)



現在の旧本館に、自らの現役時代の想いを重ねあわせ、今なお、熱く語り続ける上木幹夫氏(右端、旧本館活用委員長、元本校教諭、高4回卒)

支部・同期だより

筑波銀行桜水会

筑波銀行桜水会は、関東つくば銀行と茨城銀行が合併し筑波銀行が誕生した年の平成22年7月に第一回の例会が開催され今年で三回目となりました。関東つくば銀行も平成15年に関東銀行とつくば銀行が合併しており、三つのパワーが一つに集結したものとなっています。三行とも地方銀行ですので、土浦一高の卒業生がおり、各行を支えておりました。関東銀行においては、本店が土浦市にあったことから卒業生も多く、数十年前から土浦市内で毎年、関東銀行桜水会として例会を開催してまいりました。これまでも多くの役員を輩出し地元経済発展のために尽力してまいりましたが、今年6月に藤川雅海氏が土浦一高卒として初めて就任しました。筑波銀行桜水会としても非常に名譽なことであることはもちろんのこと、これからの一層、筑波銀行桜水会メ



ンバーの総力を結集し地元茨城のために貢献したいという考えが強くとなって参りました。

筑波銀行としては3年目ですが、関東銀行から通算し60年となる今年、関係者の皆様のご協力により職場支部として仲間入りさせて頂いたことができました。現在の学校長が藤川頭取と同窓の武井秀一校長であるのも、当会との縁を感じさせるものであります。

さて、今年の例会ですが、武井校長ならびに進修同窓会より青山副会長を土浦市の霞月楼にお招きして40名の出席で賑やかな開催となりました。現在の学校の状況や進修同窓会の状況など熱心にご報告いただいたうえに、例会の後の懇親の席でもいろいろな話を各会員としていただき、会員一同、大変感謝しております。また、今年も2名の新会員を当会に迎えております。筑波銀行では、震災後、地域復興支援プロジェクト「あゆみ」により地域に根差した活動を行っておりますが、ぜひこれからも高い志を持って筑波銀行に入行し、当会の仲間が増えていくことを希望するものです。

(事務局 本橋)

小美玉支部

今回、新たに発足した小美玉支部です。私達は今迄、小川玉里支部と美野里支部で別々に活動してまいりました。町村合併の五年間が過ぎ、進修同窓会も合併という話が出てまいりました。沼田新(小川玉里)支部長と信田正男(美野里)支部長の話し合いで、合同役員会を開催する事にいたしました。昨年(二十三年)十月、十一月と二回の会議で、時期や新役員、規約等を内定しました。当初五月に、合併総会を予定しておりましたが、都合により、九月八日、小川地区内において、第一回小美玉支部総会を開催致しました。本日より幡谷浩史会長、大曾根副会長、稲葉教頭先生の三名の方の出席を頂き、中村克



己君の司会のもとで、始まりました。大曾根副会長の同窓会活動状況、稲葉教頭の在校生の様子、そして幡谷会長は、小川出身ですので、昔の町の様子を交えた挨拶を頂きました。そして前支部長の沼田様、信田様より、今迄の経過説明があり、活発な議事進行のもとに、新役員、支部規約等が承認され決定しました。その後、懇談会に入り、すぐに会場は和やかに、想い出話等に弾んでいきました。話の中では、多くの同窓生が、この小美玉地域の各分野で活躍している事がわかり、心強く感じました。又、幡谷会長の父である、幡谷仙三郎様の百里基地建設での尽力や、兄の幡谷祐一様(元進修同窓会会長)の茨城空港開設の功績を語り継がなければと、思いも改にしました。最後に全員で、声高らかに校歌を謳いあげ散会となりました。今後より一層の親睦を図り、母校の発展を願っております。

母校だより

日本生物学オリンピック 本選に参加して

二年 丸山 諒太

私はこの夏、つくば市で行われた3泊4日の「日本生物学オリンピック」本選に参加しました。この大会は、生物学の面白さや楽しさの体験を目的とする全国規模のコンテストで、毎年7月に予選が、8月に本選が行われていきます。今年は、全国から約3600名の応募があり、予選の結果選ばれた80名が、筑波大学にて実験試験による本選に参加しました。

私が、参加をしたきっかけは、「申し込みが明日までです」という照沼先生からの連絡でした。以前から生物に興味のあった私は、すぐに参加を決めました。予選終了時には、まさか自分が本選に参加できると思っていなかったのですが、本選の受験票が届いた時には、驚きを隠せませんでした。

さて、こうして参加した本選ですが、4日間の参加を通じて、多くのことを学びました。2日間行われた実験試験では、生物学的な観察、考察の方法、研究体験などは、生物学の様々な最先端研究など、生物学の進歩を体感することができました。ただ、学んだ中で最大のものとは生物学の面白さ、これに尽きます。今回行った様々な

実験はどれも普段の授業では、体験出来ないようなことばかりで、新鮮でしたし、実験を通して分かることを推測していく作業は時間を忘れさせるほどの楽しさでした。

もちろん今回の大会で得たものはそれだけではありません。つくばに集められた80名もの、ある種「生物バカ」ともいえる生物好きの仲間、研究を体験させていただいた大学の皆様など、多くの人と交流ができたことも、得たものの一つです。実験の合間、宿舎に戻ってから、様々な時間に生物を含め、色々なことについて語り合い、お互いの親睦を深めました。今でも、連絡を取り合っていることもあります。

今回の本選は、3泊4日と短い期間でしたが、多くの人との出会いのなかで、様々な知識を得ることが出来ました。そしてこの貴重な体験を通して、生物の不思議さ、そしてそれを解き明かす面白さを再認識する良いきっかけとなりました。今後の学校生活に活かせるように願っています。

最後になりましたが、今回のオリンピック参加を後押ししてくださった皆様、この場を借りて御礼申し上げます。本当に有難うございました。

もう一つの甲子園

三年G組 長江 智紀

科学の甲子園に参加するきっかけは突然の先生からのお誘いだった。単なる知識比べではないと知り、とりあえず参加してみようと思った。

予選はまさに試験会場のようなところで行われた。多少の不安はあったものの、同じ目標を持つ者たちには壁はないもので、今まで面識がなかったチームのメンバーと問題を解くために気軽に話すことができた。私は生物を選択科目としていないが、生物が一番好きな科目だったので、その教科を優先的に解いた。教科書に載らない初めて出会う内容に一瞬戸惑ったが、日頃授業で話す先生の考え方をうまく応用していくと、面白いほどに解けた。聞きなれない単語の羅列もすんなり頭に入っていく快感はこの上ないものだった。結果、県の代表になれた。

科学の甲子園は第一回目である



科学の甲子園に参加

し、事前に公開される大会の大雑把な概要では全く対策を立てることはできなかったが、僅かな情報のもと話し合っただけで役割分担をした。ただ一つ公開された実技課題のクリップモーターカーから手をつけていった。単純な構造だけにかなり繊細な手先を必要としていて、放課後や休日、家でも何度も試行錯誤しても走らない。このまま本番でも走らなかつたらという県を背負うプレッシャーで、毎日精神をゴリゴリ削り取られていくような気分であった。本番の日の数日前とあるヒラメキにより初めて走り出したときは空を飛んだような感動だった。

科学の甲子園は大きな体育館と別館で行われ、ギャラリイやカメラマンなどがたくさんいてにぎやかな会場だった。

実技課題の結果というのと、予選は全都道府県中3位で通過したが、その後の準決勝で突然のエンジントラブルが発生して、惜しい結果となった。悔しくもあるが、他校の多くが走り出すことさえできない状況で、こうした結果を残せたことを誇りに思う。

総合の結果は中の上あたりだったが、同じ高みを目指す他県の友人ができた。自分の知らない世界をたくさん見ることができた。甲子園全体を通して、この枠では書ききれないほど、濃密で有意義な経験をする事ができた。後輩達には、一高をこれから科学の甲子園の常連校にして、かけがえない経験をしたいと思ってる。

定時制職員室より

根本 昌明

私たち定時制職員は、今年度お迎えした石井孝教頭(英語・鉾田第一高校より)を筆頭に最古参の伊藤一子(養護)・今年度一杯で引退の榎戸和也(社会・進路指導部長・二年生担任)・五年目の本橋隆志(理科・一年生担任)・四年目の猪瀬聖淳(商業・生徒指導部長・四年生担任)・同じく江面教英語・一年生担任)・三年目の小神野文彦(保健体育・保健給食部長・三年生担任)・二年目の飯嶋良夫(数学・庶務部長・三/四学年担任)そして私六年目の根本昌明(国語・教務部長・二年生担任)以上九名の教育職員と栄養職員(一名・調理員(二名)以上三名の行政職員で構成されています。その他、家庭科(非常勤)・芸術科(二名・全日制より)の先生方にもお世話になり、日々生徒たちの指導に当たっております。

最も多い年には八クラス四三六名もの生徒が在籍していましたが、時代と共に募集人員が減少し、昭和五二年から現在の各学年単学級(一六〇名)となりました。今現在の在籍生徒数は、一学年三名・二学年二名(内一名休学中)・三学年二名・四学年七名の合計九三名(九月七日現在)となっております。在籍生徒数は少ないですが、部活動も盛んに行われており、陸上競技部・柔道部は二年連続で全国大会に出場し、走り幅跳びに出場した生徒は全国大会で第三位に入賞する活躍を見せてくれました。その他バドミントン部も二年ぶりで全国大会に出場することができました。生徒達の頑張るもさることながら、先生方の地道な努力、そして進修同窓会の皆様方の支えがあったからこそ、この様に大きな実を結ぶことができたと感じております。

今後も職員一同一丸となって努力して参りますので、ご指導・ご協力方よろしくお願い申し上げます。

職員室より

理科より

主任 菅原 加津司

土浦一高・理科は、特別棟の一階に化学、二階に物理、三階には生物の、それぞれに実験室と準備室が配置され、生徒達が、自然科学としての理科へ興味や憧憬を抱き、将来、科学理論や技術の進歩へ貢献できるような人材となつてくれることを期待しつつ、大学受験へも高いレベルで対応することを考慮に入れながら、日々の授業を中心とした理科教育全般にたずさわっております。物理三名・化学四名・生物二名の教諭・実習助手一名・非常勤講師一名から構成され、綿引隆文(本校十二年目・物理・人権教育室長)、柴沼克仁(八年目・物理・第二学年主任)、小室浩之(七年目・物理・教務部副部長)、浅野武雄(六年目・化学・第一学年主任)、菅原加津司(六年目・化学・教務部副部長)、藤田一輝(二年目・化学・第三学年担任・教務部)、原田晋市(二年前本校を退職され本年度再赴任・化学・図書部)、臼井健司(十二年目・生物・進路指導部長)、照沼裕一(六年目・生物・第二学年担任・生徒指導部)、鈴木佐与(二年目・実習助手・保健部・図書部)、國府田宏輔(一年目・生物・非常勤講師)の十一名で指導にあたっています。

各階の準備室前廊下には、様々な科学関係ポスター、雑誌、単行本、標本、模型などが置いてあり、いわゆる理科室周辺という雰囲気には満ちております。意外に人氣なのが計算用紙で、特に昔の連続紙タイプの印刷紙は珍しいのか、または使いやすいためか、競争率が高くすぐに無くなっていきます。このあたりに一高生の勤勉さが伺えます。化学室前廊下の壁には白川秀樹博士の「自然のまゝに」という直筆が貼ってあります。さりげなくわら紙に書いてあるのですが、かえって静かな迫力が伝わってきます。他の学校には無い、土浦一高らしいアカデミックな廊下といったところでしょうか。

最近、準備室へ来る生徒の質問内容等を聞いてみると、理科的觀念の獲得というものは、生徒にとつて、実はあまり簡単ではないのかもしれないと感じる時があります。理科は抽象性と実体性の二面からの理解が大切なのですが、なまじ実物が見えてしまいうぶん、それが優先されすぎ、却って本質の理解を妨げてしまっているところがあるように思えます。講義と実験を繰り返して、概念的獲得を達成する、というのが結局は一番の王道なのですが、現象に一喜一憂するだけでなく、その裏側にある真実を見抜き、探求する力を養っていく必要があるということでしょう。

本校理科では、様々な分野での先端研究に携わっている方を講師として招き、「科学実験講座」なるものを毎年開催しております。海外研修(海外)も含め、このようなことができるのも土浦一高関係者を軸とした豊富な人脈によるところが大きいと思われまふ。これからは土浦一高ならではの恵まれた環境を大いに活用しながら、より一層、生徒への理科指導を充実させていきたいと考えております。

部活動報告

陸上人生を振り返って思うこと

三年B組 西村智宏

私が始めて陸上に触れたのは小学五年生のときです。それまでは剣道やテニスややっており、また叔父の影響もあって野球が好きでした。やったことはありませんが、小学校でつくば市北部の陸上大会が毎年開かれており、それに参加したのがきっかけで陸上に興味を持ち始めました。6年生の時には60mハードルで北部三位になってすごい喜んでいたので覚えています。それが、高校生になって陸上を続け私の原動力なのだと思います。中学生になって初めて専門的な先生の指導の下で練習をするようになりました。当時の私は、つらい練習とか、そういうのは嫌いだつたので楽しんで、と思った走り幅跳びを専門種目にしようと思いましたが、2人の先生がいたので、一人の先生は基本を非常に重視する先生でつまらない基礎練習ばかりを1年生のころはやらされて、「自分かやりたいのはこんなことじゃない」と思うこともありましたが、これは何事についてもいえることだと思いが、大事なものは基本を積み重ねることだということを、あとで部活だけでなく2年生になってからはぐんぐん記録も伸び始めて陸上がとて楽しくなりました。当時、初めて出たジュニアオリンピックという全国大会では全国というのの大きさを思い知らされました。自分の知らない人が、自分のいったこともない場所で練習して、だけど自分と同じフィールドで勝負している。そのことに強い感動を覚えました。

私が土浦一高に入ろうと決めたのは、勉強をおろそかにしたくないという気持ちがあったのと、「すごい先輩が一高にいる」ということをきいてきたからです。春休みのあいだから練習に参加しており、1年生のときから県大会に出られたのですが、その県大会でのリレーは今でも忘れられませんが、私は、4×100mリレーのアンカーだったのですが、3走の3年生でいけたのに北関東大会に出場できる6位までには入れませんでした。3年生の先輩に対して申し訳ない、と何度も思いました。それまでは、個人種目ばかりで自分がすることは自分が責任をとる、としか考えていませんでしたが、そのときになって自分は自分ひとりのためだけに走るのではなく、自分とは違った思いをかかえた人の分まで背負って走らなければいけないだと強く思いました。

土浦一高

電話 0298-210137
FAX 0298-213521
ホームページアドレス
http://www.tsuchinai-h.ed.jp

平成二十四年度入試報告
東大・京大・東工・一橋43名

東大22名で昨年に続き健闘
筑波大33名
進路指導部長 白井 健司

平成24年度入試は、前年度よりセンター試験の平均点が全体的に上昇、東京大学などの第一段階選抜ラインの予測が難しかったが、当該学年の綿密な指導で成功裡に乗り切った。

センター試験志願者数は昨年比約3450人減の約55万5千5百人、国公立の志願倍率は4・91倍(国立4・55、公立6・36倍)で、前年度の5・01倍よりやや低下した。難関国立大学(東工大2類、6類など)の後期日程の廃止により難関大学前期志願者の後期の受け皿が減少したこと、公立大学の志願者数が減少したことによる。難関大の志願者数は、前年と大きな違いはないが、本校生受験者の多い東京大の理系、東京工業大などが増加した。また、ここ数年の文低理高の傾向は続いており、社会科学系志願者が減少した。大学入試センター発表によると、英語124・2(+1・4)、数I・A70・0(+4・0)、物理I68・0(+5・0)、化学I(+8・6)と、平均点が上昇した。理系の受験者は物理と化学を選択する者が多く、理系の平均点の上昇は、特に東大のいわゆる足切りラインの予想を難しくした。実際理Iは770点(昨

年729点)という極めて高い点数となり、受験関連産業の予想にもばらつきが出た。本校生の平均点は、文系が687・3点(昨年比+15・9点)、理系が698・1点(昨年比+7・9点)と文系理系とも理系は昨年に続き上昇した。今春の入試結果について、主なものを挙げると以下のようなのである。

- 1 東京大学22名(新卒13名)
 - 2 京都大学6名(新卒0名)
 - 3 東工大学8名(新卒6名)
 - 4 一橋大学7名(新卒2名)
 - 5 東北大学21名(新卒15名)
 - 6 筑波大学33名(新卒23名)
 - 7 国立大医学科14名(新卒7名)
- 東大は昨年度29名、今年度22名と減少したが、一昨年回復した20名台を守った。内訳を見ると、現役で、難関の文一に3名、文二に3名、文三に1名と7名の合格者を出している。逆に理系は理科一に3名、理科二に2名であった。また後期試験で1名合格し文一に入った。現役合格者数の13名は全国の公立高校と比較した場合、見劣りしない数字である。全体の合格者数を伸ばすには、浪人をして受験する生徒の数をどう確保するかが鍵である。昨年度の卒業生には再挑戦するよう指導がなされており、25年度入試の結果が待たれる。地元筑波大は、昨年より減らしたものの、東北大学は20名を越え、合格率は40%であった。総じて、難関国公立を目指す姿勢を変えずに健闘したといえる。

平成24年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

*新卒は内数です

大 学	合格者	新 卒
北海道大	9	5
東 北 大	21	15
山 形 大	2	1
茨 城 大	7	6
筑 波 大	33	23
宇 都 宮 大	2	2
群 馬 大	2	2
千 葉 大	13	8
お茶の水女子大	2	2
電 気 通 信 大	1	1
東 京 大	22	13
東京医科歯科	1	1
東京外語大	3	2
東京学芸大	1	1
東京工業大	8	6
東京農工大	3	3
一 橋 大	7	2
横浜国立大	5	2
信 州 大	4	1
浜松医科大	1	1
名古屋大	4	2
京 都 大	6	
大 阪 大	6	3

大 学	合格者	新 卒
神 戸 大	2	2
九 州 大	3	1
宮 崎 大	1	1
鹿 児 島 大	1	1
国際教養大	1	1
福島県立医科大	1	1
茨城県立医療大	2	2
首都大東京	3	2
横浜市立大	2	1
静岡県立大	1	1
大阪市立大	1	
国公立大計	181	115
(うち医学科)	14	7
防衛医科大学校	2	
国立看護大学校	1	
防衛大学校	1	1
航空保安大学校	1	1
大学校計	5	2

大 学	合格者	新 卒
青山学院大	20	10
学習院大	16	8
慶 応 大	52	21
国際基督大	7	3
上 智 大	23	8
中 央 大	27	10
津 田 塾 大	2	2
東京女子大	8	4
日本女子大	20	12
東京理科大	74	30
明 治 大	70	30
立 教 大	64	41
早 稲 田 大	71	20
法 政 大	28	11
北 里 大	5	2
芝 浦 工 大	15	5
日 本 大	17	5
同 志 社 大	4	3
立 命 館 大	4	
そ の 他	117	4
私立大計	644	274
合格者総数	830	391

平成23年度 進修同窓会決算書

収入総額 12,406,002円也
支出総額 9,528,129円也
差引残高 2,877,873円也 (平成24年度へ繰越)

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 比較増減(Δ), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, etc.

【支出】 (残額欄のΔは決算額が予算額を超過していることを示す。)

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 残額, 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, etc.

上記のとおり決算しました。

平成24年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幅谷 浩史

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成24年3月31日

監事 熊木 士郎 印

監事 田嶋 栄吉 印

平成24年度 進修同窓会予算書

収入総額 14,488,000円
支出総額 14,488,000円
差引残高 0円

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減(Δ), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, etc.

【支出】

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減(Δ), 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, etc.

※項目間の流用を認める。

上記のとおり提案いたします。

平成24年4月8日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幅谷 浩史

平成二十五年年度 進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会・卒業周年記念祝賀式は、次の通り開催いたします。
一、期日 平成二十五年四月十四日(日) 午後一時
二、会場 土浦第一高等学校体育館

卒業周年 記念祝賀式

卒業50周年 卒業60周年
卒業25周年 卒業40周年
卒業15周年 卒業20周年
高50回 高40回
高25回 高20回
理27回 理27回
定48回 定38回

会費納入のご協力とお願い

平成二十三年年度会費納入状況は、二千六百五十五名の皆様方から八百九十八万円を納入していただきました。会費は、各事業項目に充てられますので、ご協力をお願いします。

進修同窓会規則(抜粋)
第十二条 本会の経費は第十条の入会金、年会費、終身会費及び篤志寄付金を以て充てる。
一、年会費は、六年目以降は三千円以上とする。
二、終身会費は、三万円以上とする。

編集後記

恒例の卒業周年記念祝賀式が市内ホテルで加された会員の人数が過去年度に比べ、ほぼ倍増の参加を見ました。
恩師を囲み共有した青春時代の思い出に花を咲かせる和やかな光景がそこかしこに見られ、伝統ある母校への更なる思いを深くした次第です。早くから準備に当たられた各世代の幹事諸氏に敬意を表します。

治、経済、あらゆる面で厳しい冬の時代が到来しています。円高、デフレ、領土問題等課題は山積しております。いまこそ、勤勉で冷静な対応と世界に向けて戦後日本の平和的貢献のメッセージを送るべき時とされます。各位のご健闘を祈念します。

進修同窓会会報69号
発行日 平成二十四年十二月一日
会報編集委員
編集委員長
編集委員

△今年にはオリンピック・ロンドン大会が世界の夏を席捲しました。日本のメダル数も過去2番目という快挙とともに団体競技種目での活躍が目を見えました。体操、水泳、サッカー、バレーボールなど目覚ましい成果を挙げました。個人競技とはまた別の連帯感、わばナショナルリズムが広がり、側にも強く感じられます。国内でも多くの勇気に励ましを得たのではないのでしょうか。

△一方で、国内外を取り巻く状況は、政
校内
坂 宇 鈴 鴻 鈴 堀 山 三 谷 富 木 長
本 山 川 木 木 越 田 輪 中 永 島 瀬
俊 仁 志 義 隆 志 良 道 幸 宗
一 博 郎 郎 茂 人 博 士 郎 雄 也 夫 男